

# 地球を読む



一つの大集団と多数の小集団が混在する状況を「白雪姫と七人の小人」と呼ぶことがある。1990年代の終盤あたりから、日本の政治情勢はこれに近い。何人かの「小人」がくっついて、大きくなることはあった。複数の野党を母体とした民主党が、2009年、自公政権に代わって政権の座についたが、わずか



渡辺 博史

国際通貨研究所  
理事長

## 民意の反映

### 「政権に不満」 各国で拡大

ただ、「便宜的共同」の悪弊は踏襲され、相変わらず結束力に欠ける。選挙イヤーの24年、世界中で10億を超える人が清き一票を投じた。その結果、現政権、与党が軒並み敗北した。例外は台湾の総統選

金を巡る疑惑のモヤに包まれ、今や、黒霧、とでも呼ぶべきだろうか。一方の「小人」たちは、昨年、状況は一段と悪化した。「一強」と称された「白雪」は、派閥と政治資金を占めるようにはなった。

金を巡る疑惑のモヤに包まれ、今や、黒霧、とでも呼ぶべきだろうか。一方の「小人」たちは、昨年、状況は一段と悪化した。「一強」と称された「白雪」は、派閥と政治資金を占めるようにはなった。

選挙だが、そこでも議会選挙は与党が負けた。インドでは与党グループが、かろうじて過半数を維持したが、議席は激減した。24年の選挙ではどれも、有権者が野党の政策を高く

評価したというより、現政が課題克服を実感できる政策対応をとっていないとの不満が累積している。特に力余りの状況下、所得格差や資産格差が一層顕著になった。コロナの罹患率、死亡率も所得水準に左右されることが明らかに

なり、「我々の声がかみ取られていない、もう我慢しがたい」という声が高まったと思われる。トランプ米大統領の復活劇もその延長線上にある。そもそも2大政党制が、時代に合わなくなったのかもしれない。今や典型的な2大政党制が「機能」しているのは米国くらいだ。英国ではこの20年、保守、労働、自由民主、スコットランド地域政党など複数政党が対峙した。世界的にも2大政党ではなく、複数政党が割拠し、多党連立で政権運営する国が多い。

（2面に続く）

# 地球を読む

1面の続き

渡辺博史氏 1949年生  
まれ。財務省国際局長、財務  
官、国際協力銀行総裁などを  
経て2016年10月から現  
職。経済に関する著作多数。

は「昔は良かった、あそこ  
に戻ろう」というバイアス  
があるような気がする。

は直近の国勢調査に基づい  
て配分する。

現状に適合していないと思  
う。実質「小選挙区」の一  
人区が多い参院選の仕組み  
は再考が不可避だろう。

「人口の少ない非大都市  
の音が無視されないよう保  
護すべきだ」という主張に  
は敬意を払う。だが、衆院  
選の小選挙区選出者と比例  
単独選出者で、「地域代表」  
は十分に確保されている。

投票率の低い世代選挙区  
の当選者得票数が、他選挙  
区の落選者の得票数より少  
ないことはあり得る。これ  
が大きな問題となった場合  
は、前回選挙での各世代選  
挙区の投票率や投票総数を  
勘案し、選挙区定数を毎回  
補正するルールを設けるこ  
とも一案だろう。

日本政治の最大課題は  
今や地域格差ではなく、世  
代間格差だ。諸外国でも政  
治への不満やイラツキは、  
地域問題ではなく、「国全  
体」の問題である。過去の成  
功体験にとらわれず、国民  
の声をくみ取れる制度を創  
らねばならない。

「当選者」もおり、むしろ  
過剰気味とさえ言える。  
地域代表は重要だとして  
も、役割に大差のない両院  
が、「一票の格差」という  
似た問題で混迷しているの  
は、大問題だろう。

投票は立候補者個人に対  
する単記一票とし、政党へ  
の所属は立候補者の任意と  
する。立候補資格は、満18  
歳以上で上限はなく、自ら  
の年齢に関係なく、どの世  
代選挙区にも自由に出られ  
る。複数選挙区への重複立  
候補は認めず、当選に必要  
な最低得票率は設けない。

比較的大きな2つ3党と  
数多の小政党が混在する時  
代になったのだろうか。

府県及び海外滞在有権者の  
全てを包摂する一方、有権  
者の世代ごとに形成する新  
たな「選挙区」を設ける。  
具体的には「18〜30歳」「31  
〜40歳」「41〜50歳」「51  
〜60歳」「61〜70歳」「71  
〜80歳」「80歳超」の年齢  
層別7選挙区とする。どこ  
に住んでいようと、自分が  
属する世代選挙区に投票す  
る。世代選挙区ごとの定数

異なる意見を的確にくみ取  
ることだ。もう一つは議員  
世襲の防止である。政治家  
の2世などが「若い時から  
政治に関わり、大局的に政  
治を見られる」との意見を  
全否定はしない。

「一点主義」に近い小政  
党の政策が一定の支持を得  
る現象も見られる。それぞ  
れは「ポピュリズム政党で  
はない」と主張するが、小  
政党群の集約的な動き全体  
が、政治をポピュリズム化  
させている。

年金や困窮償還、就労機  
造の変化といった問題で、  
世代格差や世代間の相克が  
現実となっている。参院選  
制度を地域から切り離し、  
各世代の考えをよりの確に  
くみ上げられる仕組みの構  
築が必要ではないか。

議院の外の改革を決定する機構  
の設置が必要になるろう。

## 参院選 声くみ取る制度に

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、

「死に票」の多さもあり、